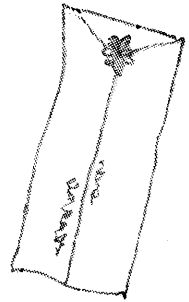


私の保育—入園当初—



清水エミ子

あなたの保育って、なに？ と、問われ、今さらのように、自分の保育をみなおさなければと、体に電流が流れる思いで編集部からの依頼を手にしています。

私の保育とは、

子どもと一緒に生活することの一言につきるように思えます。子どもと一緒に生活して、自分をいかしながら、生きていくことのいとなみをつたえていくことのように思えます。生活を創り出す喜びをわかち合い、協力の喜びを身につけていくことではないでしょうか。

そんなことは、あたりまえ、保育者すべてがそれを目ざして保育しているといわれそうですが、私も、みなさんと同じことをめざして、平凡な保育をしているということがたしかめたかったです。

☆子どもたちが、自分で、手や足を動かして

生活することを手助けする。

自分ですわる所をみつけ、きめてすわる

新入園児たちが、保育室に入って、座席を自分でえらんで、きめていくようにはげまし、実行させていきます。

とまどいを喜びに変えていくキッカケをみつけ、しらせていく保育につとめます。

「○○さん、どこにすわろうかしらね。よくいすをみて、らくそうないすにすわっていいのよ」

「××さんは、つくえのせまい方にすわるかな、ふたりならべるほうにすわるのかな。どっちがいいか、きめてすわってみましょうね」

「みんな、いま、せんせいにすわるところきめてもらわないで、ひとりできがしてきめられたわね」

「せんせいおしえてあげようとおもって、まっていたけど、おしえないですんじやったわ。びっくりした」

「となりですわっているお友だち、知っているひとも、知らないはじめてのひともいますね。よくかおをみて、おほえましよう。せんせいにもよくかおをみせてね」

というように、生活の中で、くりかえされることを、大切に、ていねいにあつかうようになります。

(どんなうたを、どう歌うかということよりもっと大切にしています)

思ったように、遊ぶ

自分をすなおに出して、遊ぶところが、幼稚園であることをしらせませす。

家庭から幼稚園集団に入るとまどっている子どもたち、ひとりひとりに、むりをせず、遊び出せるように、遊びの場をそなえておきます。

ぶらぶら保育室をぶらついていても、遊具に、自然の状態で、ふれられるような環境をつくっておくようにつとめる。

あまり整然と保育室をととのえてしまうのでなく、気らくな、

あたたかみが、生まれ出る位の、ゆるやかなちらばりをのこして遊具をそなえておく。

ひとりが、ひとつずつ手にもつことができるような遊具を、やわらかく、ちらばせておく。

机の上に、自然の状態に絵本をのせておく。(親しみやすい画面を広げておいたり、動物のぬいぐるみをママゴトコーナーにおいたり、子どものイスに、何気ないふんい気ですわらせておいたりする)

「あら、あなたがすわろうと思ったイスに、くまがすわっていますから、となりのイスにどうぞすわってください」

「あら、こんな絵本がありますね。なんでしょう」子どもと一緒に絵本をのぞきこむ。

箱積木などを、保育室の一隅にちらばせておき、二、三個をつんだり、ならべたりしておく。

歩いているうちに、足にぶつかったりするようにしておいたり。高く積んで、さわってみたり、くずしてみたいような、気持ちささうようにしておく。

あまり、遊びに、教師がむりにさそいこむことをさげます

遊具をさわり、いじりながら、自然に遊び出す。自分での遊びを割り出させるようにつとめます。

「ブランコにのりましようか？」とか、「砂場でお山づくりましようか？」

「ままごとしているわよ。先生と一緒に入れてもらわない。」などと、教師が遊びのせんたくを先どりしてしまつては、子どもたちは、ひとりりで歩き出さなくなってしまうのではないのでしょうか。ほったらかしにされているという気持ちをもたせずに、そつとみまもる余裕がほしいものです。

入園当初は、教師は、ふだんの数倍、歩きまわらなくてはなりません。歩け、歩きの保育をします。歩いて、多くの子どもとふれあい、すれちがつて、笑顔を交しあうことを数多くすることにつとめます。

「あつ、またあつたわね、先生、あつちの方に行くけどいっしょに行つてみない？」とか、

「いま、ブランコうごいているか見てくるんだけど、いっしょに見にいってましようよ」とさそつてみます。

子どもたちの体の位置を、自然の状態で変えてゆくことにつとめます。

体を移動させるのです。ほんの少しでも、十センチでも、十五センチでも、今いる所とちがう所に体を移させるようにつとめます。

「ちよつとこれ、持つてちようだいよ」

「あつ、おねがい、いっしょにおさえてて」

などと、ちよつとした、手つだいをさせるようにし、友だちを、多くながめる場を多くあたえるようにします。自分の体を動かしていく中で、遊んでみたいと思う心を育てるのです。

時間をかけて、遊びをえらばせ、ゆつくり遊びに参加させます。ボールをころがし、けとぼし、ふれるようなことから、(このために、初めからきちんとかたづけなどをするのではなく)

「この中が、積木入れ場なのよ」

「ここがボールの場所ね」

というように、少し数をへらして出し、箱からはみでてこぼれてしまわないようにし、遊具をいじることの気らくさをしらせませます。

(これは長期間するのではなく、入園一週間位または、十日位できりあげます)

きちんとかたづけることの必要と、方法、教師が、こうしなさいといふのではなく、子どもの中から、こうやるとききちんとするといふことを発見させるようにしむけます。

「こんど、これ入れてみてよ。こんどはこれどうかしら」など、積木など、きちんと箱におさまる順に手わたしていくことも一方法としていきます。

自分の生活の場を自分で作る

くつ箱、ロッカーの場所を自分できめる。

入園式の前日に、くつ箱や、ロッカーに名札をはっておかないのです。

入園式の日、名前を書いたカードをおみやげにわたし、自分の家で、自分の思うようなしるし、(絵ではない)をつけてくるようにします。

母親に、手伝ってかいたり、むりに絵を描かさないようによくたのんでおきます。

次の日の朝、自分で、カードにのりづけをして、自分でえらんだ場所に、しるしとして、はつきりつけます。

自分の背丈、自分の好みの場所をえらんでつくる喜びから、自分の生活を、つくりだしていくことの喜びとして知らせていくようになります。

「みんなが、自分できめたくつ箱よ。よくおぼえて、あしたもそこに入れましょうね」とはげまします。

ロッカーも、友だちふたりで場所をきめてカバンと帽子掛けをきめ、クレヨンなどの、材料や教具を入れる場所を作っていくます。(教師が、クレヨン、ハンドカスター、のり、ハサミ、などに名前をかいて、そなえてしまうのではなく)

母親と一緒に、家庭でたのしみながら、名前をかくところをみ

せて、かいてもらい、ひとつひとつ、日時をちがえて、ロッカーのひき出しに、子どもたちが入れていき、整備していくようになります。

自分のものを、どのように入れて、どうやって使うかも、自分の考えでさせるようにつとめます。

このように、絵を描いたり、うたったり、おどったりする前の時期を、充分につかい、ひとつひとつの生活を、自分の手で作っていく実感を、体験を通して身につけていくことをみまもりま

す。
通園カバンの中味も、母親が、前の日から入れてしまうのではなく、おき場所をきめておいてもらい、子どもが、朝、自分の手で、カバンに入れるように実行してもらいます。

おべんとうも、台所のどこかにおいてもらって、

「おかあさん、おべんとう、ありがとう」と、あいさつをして、自分でカバンに入れるようにしているのです。

(大田区立蒲田幼稚園)